



「むふう……ふうう……んふう」

物音の途絶えた暗い森に、結香の苦しい鼻息だけが響く。

純一はさつきから、しきりに腰をもぞつかせている。

喉奥にぶち当たった龟头が、柔らかい粘膜刺激に悦んでいる。

唾液たつぷりの結香の口腔はとても温かい。ねっとり濡れた頬粘膜に、茎肌を柔らかく締めつけられるせいで、ますます射精欲求が高まってきた。

啞えこんだ唇で結香は、純一の根元まで刺激してくれる。やわやわと蠢く唇が叢を押しつぶし、埋もれていた結香の口もとを露わにする。

結香の荒い鼻息を下腹部に感じ、フェラチオされている幸せを噛みしめた。我慢できずに純一は、結香の後頭部を抱えこんだ。

「ああ、結香さん！ フェラチオ、とつても気持ちいいよ！」

嗚咽をこぼしながら勃起を啞えつづける結香が、愛しくてたまらない。ともすれば腰を、猛烈に練りだしそうになってしまい、必死になって堪える。このままさらに奥深く、勃起を叩きこんでしまったら、結香が大変なことになってしまう。

「んふう……うふう……」

激しい鼻息とともに結香は、根元まで呑みこんだ純一を、ひりだしはじめる。

ずるずると引き抜かれていく茎肌に、唇の柔らかさがたまらなく優しい。勃起から伝った唾液が、結香の顎を伝い、ぼたりぼたりと闇夜に銀線を引いて落ちていく。

「ああ……熱い、純一くんのオチンメン、とつても熱いわ」

引き抜いた強張りに結香は、頬を擦りつけては、キスの雨をそこかしこに降らせまくる。亀頭エラを頬にこすられ純一は、危うくちびりそうになってしまう。

意外なほど情熱的な結香の仕草が嬉しい。でも、その理由を思うと、素直に喜べない。結香が美しければ美しいほど、淫らであれば淫らであるほど、間近に迫った別れが、純一の心に重くのしかかってくるのだった。

「……むふう……んふう」

純一の複雑な思いを知ってか、結香の口唇は、ますます大胆さを増していく。

先端裏を、硬くした舌尖で突ついては、こみあげ、垂れ落ちてくる我慢汁を結香は、音を立てて吸いあげる。じゅるる……と卑猥な啜り音が、暗くて静かな森のなかにひどく大きく響いた。

股間に顔を埋めると結香は今度は、陰囊いんのうに舌を這わせる。

皺の一本一本を丁寧ていねいに舐めなぞり、勃起の根元にまで優しく舌をつかう。

勃起と腿の境目は、意外なほど敏感で純一は、堪えきれずうめき声をあげてしまう。茎肌には、甘しごきの右手が這いまわっているから、なおさらに快感がこみあげてくる。

「ああつ、結香さん、そんなところまで舐めなくても……。僕、汗かいてるから、汚いです」

「ふふつ、でも、気持ちいいでしょ？ 遠慮なんかしないで。純一くんが気持ちよくなってくれば私、とつても嬉しいのよ」

艶然と微笑む結香の色つぼさ。涼子にだってぜんぜん負けていない。

大きく口を開くと結香は、純一を一つ、口に含んだ。

もぐもぐと口を蠢かせては、玉表面を唇で撫でまわしていく。

浅啜えされた玉が唇から、にゆるり……とひりだされるたび、純一の腰のあたりに、甘だるい快感がこみあげてくる。汚れた股間を舐めてもらう申し訳なさと、それゆえの背徳感に、快感は昂るばかりだ。

ひとしきり滑らかな快感を与えると、そのまま口中に啜えこみ、舌の上で転がすことさえしてのける。

「あう！ ううう……」

初体験の玉舐めの快感に純一は、こみあげてくる精液を必死で堪えなければならぬ。

「あ、純一くんのたまたまが、お腹に引っこんでしまったわ。ふふつ、とっても感じてるのね？ 嬉しい……」

引き締まった玉袋を、空いていた左手が、爪先でひつかくように刺激しはじめる。

ひつかくといっても指先はもちろん、力なんか入っていない。くすぐるような、撫でるような、微妙な力加減に、筒先から我慢汁が、どんどんこみあげてくる。

風に乗って遠くから、人のざわめきが聞こえてくる。ふとまわりを見まわすとあたりには、うっそうと茂った木々。野外でフェラチオされていることを純一は、今さらのように思い、感動し、こみあげてきた射精感を堪える。

陰囊を解放すると結香は、亀頭を浅く啞えて、やんわり締めつける。

そのまま軽く出し入れして、敏感極まりない亀頭粘膜を、摩擦快感に悦ばせる。

「ああっ！ そんな、なに、先っぽを！……」

思わず見下ろした結香の口もと。

甘啞えの往復運動のたび、唇と亀頭粘膜の境に唾液の泡が立ち、じくじくと湿った音を立てている。